

屋上のおとこ

美崎理恵

『屋上のおとこ』

女

警備員

男

○登場人物

古いビルの屋上。古びたベンチが一つ。  
一人の男が腕時計をじっと見ている。手には  
うっすらペンキがついている。

男の腕時計にはただ時を刻む秒針しかない。  
時間を示す長針、短針はなく、前に進むはず  
の時間が存在しないのだ。男はそのことにな  
んざりしている。

誰かがやって来る気配がする。

現れたのは警備員。男に気づかず真っ直ぐに  
端に向かい、そこに立つと、大きく深呼吸を  
して、ゆっくりと見下ろす。そしてもう一度、  
より深く深呼吸をする。

男、思わず近づいて、

男  
飛ぶのかよ。

警備員、驚いて男を見る。それに驚いて男も  
警備員を見る。

警備員  
な、なにしてるんですか。

男  
……え？

警備員  
こ、ここ、立ち入り禁止ですよ。

男  
おまえ……。

警備員  
は？

男  
……見えてんだ……オレが見えてんだ。

『屋上のおとこ』

警備員 な、なに言ってるんですか。

男 そっか……。

警備員 そっか？

男 そっかさっか。

警備員 そっかって、なんですか。

男 そっか、同じだからか。

警備員 え？

男 だから……。おまえ、今なにしようとした？

警備員 ……。

男 今、なにしようとした？

警備員 ……。

突然飛び降りようとする警備員。男、警備員に飛びつく。

警備員 離してください！

男 離さない。

警備員 離してください！

男 離さない。

警備員 離してください！

男 いいことないぞ、飛び降りたって。

警備員 生きてたっついていいことないじゃないですか。

離してください！

『屋上のおとこ』

男 やめとけ。

警備員 放つといってください！

男 やめとけて。

警備員 あなたになにがわかるんですか！

男 わかるよ、経験者なんだから。

警備員、動きを止めて、男を見る。

警備員 経験者って、なんのですか。

男 だから……オレが先なの。

警備員 先？

男 うん。オレ、もう飛んだの。

警備員 飛んだ。

男 ああ、ちょうどここから。

警備員 ……。

男 だからオレ、死んでると思うんだよね。自殺かな、やっぱり。

警備員 ……知りませんよ、そんなこと。

男 たぶん死んでる、オレ。

警備員 ……おちよくってる……。

男 は？

と警備員、また飛び降りようとする。男、止めて、

警備員 離してください！

男 離さない。

警備員 離してください！

男 離さない。絶対離さない。

警備員 なんで！

警備員、男を突き放し、

警備員 放つといってくださいよ！ 僕は死にたいんですよ！

死んで恨みをはらしたいんですよ！

男 恨みってなんだよ。

警備員 あなたには関係ないでしょ！

だから、言えるだろ。聞いてやるよ。言ってみな。飛び降りてどうすんだよ。どうやって恨みはらすんだよ。

警備員 ははは、毎日出社する度に、退社する度に、

思い出させてやるんですよ。エントランスの前に、血だらけで、恨みたっぷりで、横たわっている僕の体を……ははは！

男 なんだか知らねえけどやめとけ。死んでもいいことないから。

警備員 生きていればいいことあるんですか！

男 あるかもしれねえぞ。

警備員 あるわけがない！

男 わかんねえだろ。

警備員 わかんねえ？ あなた、私のなにを知ってるんですか。ここから私になにを期待しろって言うんですか。そりゃ僕はたいした人間じゃないですよ。ただ突っ立ってるだけの男ですよ。カッコ良くないし、頭だつて空っぽだし、時代にもつけていけてないし、でも、「おはようございます」って言ったなら、「おはようございます」って言って言ったら、「おはようございます」って言ってくれなくても、こう、頭ぐらい軽く下げてくれてもいいじゃないですか。「おはようございます」って言ったら――

男 おはようございます。

警備員 え……。

男 おはようございます。

警備員 ……。

男 おまえ、警備員？ だよな、その格好。

警備員 そうですよ、警備員ですよ、ははは、警備員。

男 このビルの？

警備員 そうですよ、このビルの警備員ですよ、ははは。

男 なあ、教えてくれねえか。ここから、このビルの屋上から飛び降りた男のこと、オレのことなんだけど、なにか知らねえか？

警備員 なに言ってるんですか。

男 ここに来て初めてなんだよ、人と話するの。そりゃ死んでんだから仕方ねえけどさ、おまえが死のうとしてオレたち、うまいこと通じ合ったわけじゃない？

警備員 うまいことってなんですか。通じ合ってたんかいませんよ。

男 じゃオレが見えるっていうのはどういうことよ。

警備員 ……おちよくってるんだ…。

男 おちよくってねえよ。むしろ、わかるよ、なんか。

警備員 わかる…。

男 おまえ、頭良くねえだろ。

警備員 ……。

男 頭悪くて、不器用で、うまくやれないっていうのかなあ、だから金もねえし、何やっても空回りで、なんか下のほうにいてるって感じだろ、世の中の。わかるよ。うん。だからうまいこと通じ合ったんだな、オレたち。

警備員 なんなんですか、あなた。

男 覚えてねえんだ。覚えてるのは、こっから飛び降りたことと、空が青かったこと。(空を見る)……うん、やっぱりオレ、死んでんだな。なのになんでここにいんだ？

警備員 はは、地縛霊ですか。この世に未練残ってる、それがはれないと成仏できないのな。

男 未練かあ……。。

警備員 知りませんよ。

男 ん？

警備員 だから、ここから飛び降りたっていう男のことですよ。

男 おまえ、いつからここで働いてる？

警備員 一年くらい前ですか。

男 じゃあ、俺が飛び降りて一年は経ってるってことか……。。

警備員 そういうことになりませぬ、あなたが地縛霊であるならば。でも、ははは、地縛霊、初めて見ましたよ。ははは、すごい、面白い、地縛霊。ははは。

男 おまえ……。馬鹿なくせに嫌味な奴だな。

警備員 は？

男 うまくやってけないってのは、おまえにも原因があるんじゃないか？

警備員 ……。

男 もう、泣きそうになるなよ。馬鹿なくせに嫌味な奴で、しかもちよつとナイーブ。あー面倒くせー。

警備員 ……。

と警備員、また飛び降りようとする。男、止める。

警備員 離してください！

男 離さねえ。死んでも離さねえぞ。

警備員 もう死んでるんじゃないんですか！

男 ああ。死んでるよ。だから離さねえ。意地でも離さねえ。

警備員 じゃあ、証拠見せてくださいよ！

男 証拠？

警備員 あなたが死んでるって証拠。

男 見せてやったら、オレのこと、調べてくれるか？

警備員 いいでしょう。調べましょう。

男 よし。

警備員、男に腕の時計を見せる。

警備員 ん？ 時計？

男 馬鹿、よく見ろよ。

警備員 (時計をよく見て) なんですかこれ。秒針しかないじゃないですか。

男 ああ。

警備員 時間わからないじゃないですか。

男 ねえんだよ、時間。

警備員 馬鹿なんで、わかるように言ってもらえますか。

男 一秒から始まって六十秒まで行くとまた一秒に戻って、六十秒まで行くとまた一秒に戻って、永遠とその繰り返し。

警備員 当たり前じゃないですか。

男 何時もない。何分もないんだよ。

警備員 そうですか。でもそれって、別に証拠じゃないですよ。

男 腹も空かねえ、髪も伸びねえ髭も伸びねえ。ションベンだってしたくねえ。この屋上で、オレってなんで死んだんだあって考えて、繰り返しされる六十秒の中にただただ存在してるだけ。

警備員 存在してるじゃないですか。

男 おまえ、ほんと嫌なヤツだな。

警備員 そんな時計、長針と短針を取ってしまえば、いくらでも作れますよね。

男 わざわざ作ってどうすんだよ。

警備員 私が訊きたいですよ。

男 想像してみろ。なーんも起きねえんだぞ。なーんも変わんねえんだぞ。

警備員 それは大変ですね。

男 おまえ、生きてんだもんな。いくら言ってもわかんねえよな。

警備員 僕が死んだら、ここで二人で楽しく暮らしますか。

男 馬鹿言ってるじゃねえよ。

警備員 はは、幽霊にも嫌われるんですね、僕は、はは。

男、ベンチに座って空を見る。

男 こんな青だったなあ……。

間。

警備員 ずっと気になってたんですけど、それ、なんですか。

男 は？

警備員 手についてるの。ペンキ、ですか。

男 かなあ。

警備員 なにしたんですか？

男 なにしたんだろうね。

警備員 ペンキ屋さんですか。

男 わかんねえ。でも、これ見ると、すげえ悲しくなんだよ。

警備員 悲しく。

男 ああ。

警備員 そういう目にでもあったんですかね。

男 か、誰かをそういう目に合わせたか。

警備員 だから成仏できないんですか。

男 かもなあ。

間。

警備員、ゆっくりと屋上の端に行く。

男 おい。

警備員、下を眺める。

男 やめろって。

警備員 違いますよ。

男 え？

警備員 今、僕がここから飛び降りたとして、誰か悲しむ人いるかなって。

男 いるだろ。一人や二人は。

警備員 ……。

男 え？

警備員 へへ……。

警備員、首を振り、次の瞬間、飛び降りようとする。と女がやってきていた。

女 やめて。

男・警備員 え？

女 あ、ごめんなさい。なんか、飛び降りるのか  
と思っちゃって……。

警備員 あ、いや、その……屋上の点検に、はい。

女 ああ、ごめんなさい。

警備員 いや……あの……。

女 あ、立ち入り禁止ですよね、ここ。でも鍵が  
開いてたんでつい……。

警備員 ああ、僕が開けっ放しにしてたんで、この人  
も、ね。(男を指差す)、はは……。

女 ？

警備員 あ、だから大丈夫です。

女 じゃ……ちょっとだけいいですか？

警備員 え？

女 ここにいても、ちょっとだけ。

警備員 はあ……。

女 それともお仕事の邪魔かな。警備員さんって  
大変そうですね。

警備員 あ、いや、大丈夫です。いいです。どうぞ。

女 ありがとうございます。じゃ、ちょっとだけ。

警備員 はい……。

『屋上のおとこ』

警備員、女から離れる。

女、周囲を見渡す。

女を見つめる警備員と男。

女  
馬鹿。

警備員  
は？

女  
あ、いえ……。

警備員  
はい……。

少しの間。

警備員  
馬鹿？

女、警備員を見る。

警備員  
いえ……。

女、小さく頭を下げる。

男も、小さく頭を下げる。

間。

警備員 このビルの方ですか。

女 え？

警備員 いや、お見かけしたことがないもので……。

女 ああ。前にね、このビルの中の会社で働いたの。

警備員 そうですか。

女 え、わかるものなの？

警備員 はい？

女 ここで働いてるかどうか。

警備員 顔を見ればだいたい。毎日立ってますから、エントランスに。

女 え、すごい数でしょ？ 働いてる人。

警備員 まあ。

女 すごい。さすが。

警備員 はあ……はは。

女 もう長いの？

警備員 一年ぐらいですか。

女 私と入れかわりぐらいかな。私、一年ちょっと前ぐらいまでここで働いてたの。

男 ！

女 ここに来るのもそれ以来。屋上、全部きれいにしたんだね。大工事だったって話は聞いてたけど。

女、周囲を見渡す

男 おい。

警備員 (小さく) はい？

男 訊いてくれ、この女に。このビルの屋上から  
飛び降りた男のこと、なにか知らねえかって。

警備員 自分で訊けばいいじゃないですか。

男 訊けねえから頼んでんだろ。

女 あの、どうかしましたか？

警備員 いや、この人が……。

女 この人？

警備員 え？

女 はい？

警備員 え？

男 だから言ってるだろ。

警備員 本当に？

女 はい？

警備員 あの、今、屋上には人が何人いますか？

女 え？ ……ふたり？

警備員、女から男が見えてないことを理解する。

警備員、男に詰め寄り、

警備員 (男に) 死んでる？

男 だからそう言ってんだろ。

警備員 じゃなんで僕にはあなたが見えるんですか。

男 だから、おまえが、人として中途半端な位置にいるってことだろ。

警備員 おお……。

男 それより訊いてくれよ、オレのこと。ほら。

男、警備員に押され、女の元へ。

女 ……はい？

男 ほら！

警備員 ……天気、いいですね。

男 おい！

女 そうですね……。 (空を見る)

警備員 ……。

男 オレにはおまえだけが頼りなんだよ！

警備員 あの……前にここで働いていたって……。

女 はい。

警備員 そうですか。

男 終わってんじゃねえよ！ 訊いてくれよ！  
ここから飛び降りたヤツのこと知らねえ

警備員 か！

警備員 ここから飛び降りたヤツのこと知らねえか！

女 え……。

警備員 すみません。

男 知ってる……。この女、知ってるよ。

警備員 え？

女 どうして？ あなた、知ってるの？ その人のこと。

警備員 知ってるというか……。その……。ごく最近話をしまして……。

女 ごく最近？

男 (女に) おい、教えてくれよ、あんた知ってるんだろ、オレのこと。

女 話をした……。？

男 (女に) な、頼む。そうしないとオレ、いつまで経ってもここでさ……。この秒針だけの世界でさ……。

男 お世話になりました。

男・女 え？

警備員 昔、その人に、ここから飛び降りたその人に。

女 そう。そうなんだ。

警備員 はい。

女 なんかわかる。あいつが好きそうだもん。

男・警備員 え？

女 あなたみたいなの。

男 (女に) あんた、オレのこと知ってんのか？

警備員 あの、でも、詳しくは知らないんです。その

：：：なんで飛び降りたのか：：：。

女 ああ。馬鹿だったからじゃない？

男 ええ？

警備員 あの、その人も警備員：：：？ じゃないですよ。

よね。

女 知り合いなんでしょ？

警備員 その、仕事のことはよく知らなくて。

女 あ、飲み屋で会ったんでしょ。

警備員 そうです。

女 アイツ、お酒好きだったもんなあ。

警備員 好きでしたねえ。

女 アイツね、このビルをピッカピカにすること

に生きがいを感じていたの。

警備員 生きがい。

女 うん。それを誇りに生きてたの。このビルの

ね、清掃員。

警備員 清掃員。(男を見る)

男 : : 。

女 彼が磨いたあとの床はピッカピカ。もうね、

見てすぐわかるの。ああ、彼が磨いたんだな

って。「こら、汚くすんじゃねえぞ」「おい、きれいに使えよ」「こら待て、きれいに使えって言うってんだろ！」言っちゃうんだなあ、馬鹿だから。

警備員

誰にですか。

女  
だから、下請けなわけで……。それなのに、彼のところに仕事を発注している人たち。ピルで働いてる人たち。だれかれ構わず。

警備員

馬鹿ですね。

女  
トラブルになるようなこと、わざわざ言わないほうがいいよって、私も言ったんだけどね、聞かなかったなあ、全然。そういうとこ、好きだったんだけど。

警備員

失礼ですが、どういったご関係で。

女  
私の彼氏だよ。

男、警備員、驚いて女を見る。

女  
色んな人がいるじゃない。掃除の人間に、そんなこと言われると頭来たりとか。

警備員

わかります。

女  
で、そういう人たちってわざと汚すの。そして、それから頭に来てね、言うのよ。「耳どころ、馬鹿野郎！」だけど、嬉しそうなんだなあ。その汚れをきれいさっぱり落として、ピッカピカに磨き上げて言うのよ。

男・女

「オレに落とせねえ汚れはねえ。もし落とせなかつたら、このビルの屋上から飛び降りてやるよ」

男

あ……。

女

馬鹿でしょ。

警備員

(男に) ば、馬鹿なんじゃないですか！

女

ね。

女、周囲を見渡す。

女

真っ青で、雲一つなかった。その真っ青な空の下に、赤、白、黄色、緑、茶色、ピンク、オレンジ……。

男、手のペンキを見る。

女

ここに、ペンキがばらまかれてた。

男、周囲を見る。

女

会社の連中がこそそ話してるの聞いて、私がかここに来たときには、もうアイツ、座り込んでた。

男

落とせないんだ……どうしても……。

女 魂が抜けたような顔してたな……。私のほう  
全然見てくれなかったな……。ちくしょう：

警備員 馬鹿ですよ……。やっぱり馬鹿ですよ！

女 今日ね、声が聞こえたような気がしたの。この  
ピルの下を通ったときにね、あいつが誰かと話  
してるような声。そんなわけないのに、思わず上  
がってきちゃった。屋上のドアが開いてるってわか  
ったときはドキドキした。もうどうしようもない  
ってわかってるのにね……。あのときから、ただ  
ただなーんにも変わらず、時間が過ぎて行くだけ。

男 すまん。

女には届かない。

男 すまん。

女には届かない。

警備員 謝りたいんですよ、あの人、あなたに。

女 え？

警備員 馬鹿ですけど、もうどうしようもないんです  
けど、あなたに謝りたくて、秒針だけがぐる  
ぐる回る世界をさまよいながら、ここにいる  
んです。

女 なに言ってるの……。

男 すまん。

警備員 聞こえないんですか？

女 え？

警備員 聞こえたっていいじゃないですか。ここに  
いるですよ！

女 聞こえないわよ！ ……なんにも……聞こ  
えない……。

男 ……。

警備員 (女に) すまん。

女 ……。

警備員 (女に) すまん！

女 やめてよ。

警備員 (女に) すまん！

女 やめてよ！

男 もういいよ。ありがとよ。おまえが来てくれ  
たおかげで、(女に歩み寄り) こいつに謝る  
ことができた。

警備員 ここにいるんです。目の前に！

女 だからやめてって！

警備員 このままでいいはずないですよ。

男 いいよ、もう。

警備員 (女に) 動かないでください。

女 え？

警備員 (男に) もっと近づいて。

警備員、男を女の前に押し出す。と、女、後ずさり。

警備員 (女に) 動かないで！

女、足を止める。

警備員 (男に) 何やってるんですか。もっと、ほら、近づいて。もっと。もっと。もう少し。

男、女の前に立つ。向き合う男と女。

警備員 見えないですか。感じないですか。ねえ。

男、ペンキのついた手で女の頬を撫でる。

女 ……ペンキのにおい……。

男 すまん。

女 ほんとにいるの……。

男 いるよ。目の前に。

女 いるんだね。

男 ああ。

女 ……馬鹿だから仕方ないけどさ……絶対駄目。死んだら駄目なんだって……。

警備員 ……はい。

男、頷き、ゆっくりと女から離れて行く。

男 (警備員に) ありがとうよ。

警備員 ありがとうございました！ (頭を下げる)

男、笑っている。そして腕時計を見る。

男 あ、止まった。

警備員 え？

警備員、頭を上げると、もう男の姿はない。

警備員 あれ？ あれ……。

明かりが落ちる。

了